

山と博物館

第34巻 第12号 1989年12月25日 大町山岳博物館



「フンから動物のいろいろなことが分かります」友の会東沢カモシカ観察会(11/5)で

友の会の一年を振り返って思う

荒沢 進

一ヶ月に一回は何か行事をと企画して、マンネリ化も無く、毎回沢山の参加者を得て無事終えて来た。が、「友の会」の発足時の目標であったはずの「大町に日本で初めて設立しユニークな活動をして来た我山岳博物館の次代をになう若者と山博の活動に協力し、より素敵な博物館を創造する事」とは相当異なる活動となってしまうような気持ちがある。

確かに昭和二十六年当時とは世の中も変り十年の周期としても、四段階のアップがあっても当り前かも知れない。全国各地に博物館が出来ている。大町市内にも後続の博物館が幾つか出来ている。仲良しグループが集まって、個々が楽しい思い出を作る事は、我々の活動の目的や目標により近づくためには是非必要ではあるが、個人だけが楽しくて、活動する本来の目的から離れてしまったのでは「山岳博物館友の会」は仲良しグループに変えてしまわなくては行けない。

春一番の恒例行事には「小鳥の声を聞く会」がある。子供達が朝早々に起き出して静かに小鳥の声に姿に耳目を傾ける。鳥ばかりでなく、山の姿、木の種類、草花にも当然注意が向けられて、一年がスタートする。夏の「山行」も、秋の「黒部ダム・発電所見学」も、春秋の自然観察会も、博物館の教育・普及事業の役割をも担っている。一人ではなかなか動けないが、会として催されれば参加し知識も十分に得られて楽しいものである。とりわけ今年特に追加した「東沢カモシカ観察会」は最高だった。ゲージに入れられ、金網越しに見合うのではなく、自然の内に生活するカモシカや猿が見られたからだ。

私は「友の会」の発足時から、より多くの人達に「山岳博物館と友の会」に目を向けていただけるようにと願った活動をして来た。昭和が平成に変わったように、次世代の人達のためにも山岳博物館も友の会も変って欲しいと思う。

(山岳博物館友の会会長)



山博友の会の一年

友の会事務局

総会 三月二十六日

(参加者) 会員のみ約四十名

堀勝彦先生(豊科町在住)の特別講演会
「旅する心」も同時開催。

青木湖周辺の自然と文化財めぐり

大町市教育委員会と共催 四月三十日

(参加者) 会員三十五名 一般二十八名
(講師) 草間勉・平林国男(植物)

宮田渡(昆虫)

篠崎健一郎(歴史・考古)

島田哲男・新井和男(考古)

丸山卓哉(地質)

市の文化財オオヤマザクラやその他の植物の観察、水棲昆虫の解説、湖底遺跡の観察・土器採集、糸魚川・静岡構造線・珪藻土の観察、塩の道石仏の見学等、周回約六・五kmの青木湖を一周歩いての内容豊富な会だった。



青木遺跡で土器の説明を聞く

春の写生大会 五月十四日
博物館・市教委・中日新聞社と共催
(参加者) 主に市内児童生徒 九十九名
山岳博物館とその周辺で風景・動物・草花



早朝、山博裏山で小鳥の観察 宮沢洋介氏撮

小鳥の声を聞く会 五月十三・十四日

(参加者) 会員三十名 一般五十五名

(講師) 長沢修介・田原偉成・三尾利彦
(鳥) 平林国男(鳥・植物)

清沢由之(主に山菜)

草野順子(宮沢賢治の作品)

丸山卓哉(星)

県の山岳総合センターに宿泊しての恒例行事。参加者の三分の二を小中学生が占める。一日目は夕食後に学習会。スライドを使っての小鳥や自然全般の解説、鳥や星にまつわる宮沢賢治の作品の朗読や合唱、星と星座の説明(天候が悪く天体観察は中止)が行われた。二日目は早朝から山岳博物館の裏山での小鳥の観察、山菜の解説などが行われた。

など自由な題材に筆を走らせた。作品のうち三十二点を選び、第34回中部地方動物園水族館写生コンクール中央審査に提出。文部大臣奨励賞をはじめ各賞を受賞した。全作品は六月十八・二十五日、博物館の「動物写生画展」で公開された。

前越平(嶽の峰)ハイイク 六月十一日

(参加者) 会員のみ二十一名
(講師) 宮田渡(生物全般)

嶽の峰は大町ダムの南に位置する一六二三mの小山であるが、大町市街からの北アルプスの高岳の眺めを唯一遮っている前山である。前越平は嶽の峰の鞍部で、この周辺から北葛岳・三ツ岳間が眼前に現われるはずであった。林道の登りは主に植物を覚えながらの二時間半。前越平に着いても生憎の濃霧に視界は閉ざされ、寒気も増したため、動物のフンなどを観察して早々の下山となった。

前越平ハイイクに参加して

村瀬孝子(大町市)

雪の舞う時期になって六月の山歩きのことを、とは酷な話である。仕事の合間思い出すままを……。

あの嶽の峰行きの案内状は覚えていた。大町からみて嶽の峰なかりせば、と思うのならイツソのこと登ってみようではないか、と。しかしそううまくはいかなかった。朝、雨は上ったものの何時また泣き出すか分からない空模様。結局濡れる程の雨には逢わなかったが、山のむこうは総てミルク色の霧だった。道幅の広いゆるやかな勾配の、それでいて全く人気のない山道を仲間同志三々五々気味の向くままお喋りをしながら歩くというのも、

山岳博物館の誕生は昭和二十六年十一月。それから二年目に「博物館研究会」が発足したという。友の会の歴史は、この研究会までさかのぼるが、幾多の紆余曲折を経て現体制で再スタートしたのは昭和五十二年である。

平成元年十二月十日現在の会員数は、一名で入会する個人会員四九名、同居の家族で入会するファミリー会員が七七家族二八七名の計三三六名と、賛助会員一団体である。

活動は会員からの年会費(個人三五〇〇円、ファミリー一家族四〇〇〇円等)や参加費などを主な財源に独立会計でまかなわれている。会員の特典としては、①博物館への無料入館 ②本紙「山と博物館」の配布 ③年会報「ゆきつばき」と、各事業他を不定期に通知する「ゆきつばき通信」の配布 ④博物館施設・資料の条件付利用 ⑤友の会主催事業への無料または実費参加などがあげられる。

運営は荒沢進会長・武田武副会長と、博物館職員も含む運営委員会(長沢正彦委員長)によって進められ、事務局も博物館内に置かれて館の職員が担当している。この点で友の会は博物館と密接に連携した相補的外部組織として位置づけることができる。

ここでは今年度中に実施した各行事の概要に触れ、あわせて何名かの参加会員の感想を紹介して、友の会活動の報告としたい。

(本文中講師敬称略)

一本道の登山道とはひと味ちがうものがあった。霧の中で特別歓声をあげる風景があった訳でもないが、暑からず寒からず、体も気分も気楽にホクホク歩き続けたことは、それはそれで結構楽しいものであった。

いま、あの峠辺りは厚い落葉の上に雪が積っているだろう。静寂そのものの山の中に思いを馳せながら、年末の忙しさに追われている。

長畑遺跡見学 八月十九日

(参加者) 会員のみ五名

(説明) 島田哲男(考古)

自然と密接に関わっていた古代人の暮らしのぼうと、大町市街の南西の山際に位置する長畑遺跡を見学した。当時発掘調査の最中だったが、教育委員会のご好意で特に作業中のところを見学させていただいた。

長畑遺跡を見学して

寺島健郎(大町市)

長畑遺跡は約五千年前から五百年前までの長い期間に渡った住居跡で、特に貴重な発見は「平安時代の製鉄村」であるという。この村は約百軒位と推定されている。教室での説明会とちがい現地見学は感動や想像を豊かにする。住居跡をみると大地の一部が丸く黒くなっている。これが柱の穴である。この上に屋根がある狭い一部屋である。中央近くにいりろりのあるのが縄文から弥生時代で、壁際にカマドのあるのが平安時代のもの。出土品から当時の人々を想像するのが楽しい。製鉄所については地面にひろがる褐色の鉄滓が印象的だ。鍛冶屋集団があったのではないかという謙やフイゴ、炭などの発見は古代の姿をほうふつとさせる。



汗だくで雨飾温泉下に着く 一志敬子氏撮

この環境は長畑の山際で狩には便利だったろうし、材木にも不自由しなかったと思われる。しかしこの山際では夏は暑い、秋から冬になると二時半か三時には陽が入って寒くなり大変だったのではないだろうか。こういう場所に住んだ理由はいろいろあると思う。

古代の人が一番恐れていたのは寒さ等より水害だと思ふ。長畑は地形的にみると嶽の峯の北東の尾根が張り出してその陰になり、高瀬川がいかにか荒れようと水害はなかつたと思われ。上原遺跡や借馬遺跡もまた然りである。これが人々を安心して住ませたとする。発掘作業をしている人達も古代への魅力とロマンを感じておられると思う。五千年前の人も使っていたであろう泉がそばにあり、その水でお茶をいただいた。笑い声のひびく楽しい休憩であった。昔も猿がいたのだらうか、この発掘場へ猿が様子を見に来るといふ。あつた若い女性がいわく「お猿さんにも手伝ってもらったら」と。古代の人に親しみを身近に感じた楽しい夏の午後の一刻であった。

山と温泉の旅ー雨飾山登山ー 九月九・十日

(参加者) 会員のみ二十八名

(講師) 武田武(リーダー・登山指導)

平林国男(植物他)

一日目は糸魚川市山口の塩の道資料館などを見学してから、むし暑く暑い車道の登りに徒歩約二時間半。雨飾温泉泊。二日目は五時間にして雨飾山頂着。小谷温泉へ下山して大町方面へ戻った。頂上付近に宿泊施設がないので、二日目はハードな行程になった。

キノコ学習会 十月一日

(参加者) 会員二十二名 一般十八名

(講師) 長沢正彦・太田勇

秋の恒例行事。博物館で開催中の「秋の草花とキノコ展」で予備学習をしてから博物館の裏山を歩いて実地勉強をした。下山後は採集したキノコの鑑定会を行った。

キノコ学習会に参加して

草彌順子(八坂村)

私の主催する「八坂ものがたり文化の会」では、秋から宮沢賢治の「どんぐりと山猫」をテーマに活動しています。

一郎がまたすこし行きますと、一本のぶなの木のしたに、たくさん白いきのこが、どつてどつてこと、変な楽隊をやつてゐました。という箇所、子供たちは首をひねりました。ぶなの木の下に生えていた白いきのこは一体何でしょう。図鑑で調べました。どうもびんときません。折よく友の会の「きのこ学習会」があつたので、百聞は一見に如かずと、八名の元気な子供たちをひきつれての参加となつたのです。

去年の成果、マツタケのことを耳にし、ぶ

なの白いきのこのことはどこかに行つてしまつた私たち。ぶなの木もなかつたので、童話の白いきのこをつきとめることと、幻に終つたマツタケは来年までおあずけです。

やぶや急斜面をもとせせず、珍しいゴムタケや、傷つけると乳を出すチチタケ、扇の形をしたオオギタケ、フランス料理に出るといふ黒ラッパ、ウラベニホテイシメジ(有毒のクサウラベニタケに似ているので用心!)や、本シメジを見つけた子もいて、どの子も楽しかったようです。昼食にきのこの汁を九杯もお代わりした子もいて冷や汗をかきました。が、開催中のきのこの展を熱心に見ていたことや、観察ノートに記録している子供たちの姿に参加してよかったと思ひました。単なるきのこの狩りでなく、専門の先生が手ほどきして下さる学習会だったことが、子供たちの好奇心を刺激し、学ぶ意欲を高めてくれました。後日、八坂小の秋の遠足では、彼らはきのこの博士ぶりを発揮し、大峰山頂でのきのこの汁に大いに貢献したことも聞いております。

黒部溪谷探勝会 十月十四・十五日

(参加者) 会員のみ二十名限定

関西電力のご好意で、黒部ダムより黒四発電所より樺平宇奈月と、黒部溪谷の自然と人工(電源開発)を尋ねた。魚津泊まりの宿泊班は魚津埋没林博物館を見学、一部は富山市科学文化センターも見学して大町方面へ戻った。

小遠見(天狗尾根)トレッキング

十月十五日

(参加者) 会員二十四名 一般五名

(講師) 宮田渡(生物全般)

宮沢洋介・丸山卓哉(地質)

縮内由香里(リーダー)
 五竜とおみスキー場のテレキャビンを利用し小遠見山頂へ天狗岳へ長見山へ佐野坂スキー場と、遠見尾根の支尾根を下るトレッキング。このコースは利用者が少ないため、下草や根が多く、かなりの時間・注意力・労力を要したことは、一般登山ルート以上だったと思われる。小遠見山付近で、白馬へ鹿島槍の雄大な景観を堪能できたのは幸いだった。

小遠見トレッキングに参加して

笹川幸雄(大町市)

この天狗尾根歩きは、大変面白く楽しい一日でした。普通「山歩き」というと、山歩き「登山」山頂征服、なんてことに考えが及びますが、今回の「天狗尾根コース」は、大町側からみて、後立山連峰の手前にある山なみで、いわゆる「西山」を歩いたという事でしょう。小遠見山から、天狗尾根へ、そして長見山に至る道がこんなに楽しいとは考えもしていませんでした。このコースでは、右に五竜岳、鹿島槍ヶ岳がぐつと迫り、左の眼下には



小遠見山頂にて、ここから長い下り 丸山卓哉氏撮

北安曇の聚落が指呼の間に望め、また長見山附近には、美しいブナ林やその他の広葉樹林があり、その森林浴は今回のトレッキングのなかでの醍醐味でした。しかし、この天狗尾根の細く急でアツシユが覆いかぶさった道は、同行の皆さんにとつて、相当にきつかったようです。けれども「山道」とはこんなものです。私は久しぶり山道らしい山道を歩いたと、今でもその感触を楽しんでいます。

ですから、山道のトレッキングには、こんな道歩くことは常識と考えて、悪い道に対応できる支度を考えることが大切だと思います。今回のトレッキングは確かに難路でした。大勢の参加者でこのコースの踏破は強行歩となりましたが、役員の皆さんが、充分な下検分をして計画実行されたおかげで、参加者全員無事に踏破できました。この事は、計画段階に充分な調査と下検分ができるなら、かなりの難コースでもある程度の大人数でも、踏破できるという事を証明したことになります。役員の皆さん、大変ご苦労様でした。

東沢カモシカ観察会 十一月五日

(参加者) 会員のみ二十名
 (講師) 千葉彬司(カモシカ他)
 宮沢洋介・丸山卓哉(地質)

高瀬川の支流の東沢で行われた初の試み。東京電力のご好意で、七倉へ高瀬ダム間の自動車通行の許可をいただき、高瀬ダムへ東沢第二堰堤間を歩いた。七倉ではサル群れをじっくり観察。高瀬ダム途中の車道際では早くも一部参加者が至近距離にカモシカ一頭を発見。しかも目的地の東沢では約五十mの近距離で若いカモシカ一頭を全員で長時間観察することができたほか、様々な動物のフンや



カモシカ(矢印)をじっくり観察

食痕も調べることができた。遠く槍ヶ岳も望める小春日和とともに、好運な一日だった。

東沢カモシカ観察会に参加して

小川裕美子(東京都)

友の会創設以来の名のみの会員が、久々に参加を申し出た。旧館から新館への引越、黒部の高熱ずい道、そして三回目が今回の東沢カモシカ観察会である。一昔以上も前、一人旅で大町を訪れ、山岳博物館で生まれて初めてニホンカモシカを見てから、私はとりこになった。二週間の博物館学芸員実習も当館にお願いし、その後幾度もフラリと大町へやってきました。

さて当日、出会えたカモシカは一頭だけではあったが確率から言えば非常にラッキーだったに違いない。白いカモシカだった。幾分幼さの残る、やさしい顔立ちのカモシカだった。見つめ続けるうちに、遂に会う事になったカモシカ、岳子の事が頭に浮んだ。私

が初めて博物館を訪れたのは、丁度岳子の死と入れ違いだ。けれど岳子の飼育が開始された昭和三十一年は私の生まれた年であり千葉さんのお書きになられた「カモシカ物語」や「カモシカ日記」を読んで、私の中で岳子は旧知の友のような存在になっていたのだ。そしてまたその朝、運まきながら大好きだった木曾生の死を知った。博物館を訪れる度真先に彼の所へ足を運び、「木曾生、木曾生」と呼びかける私の声に斜面を駆け上ってきた、あの可愛くて仕方なかった片目のカモシカの姿とも相まって、この十数年間のカモシカ達との思い出が走馬燈のように心を駆け巡ったひとときであった。

人間達の勝手な都合で、保護されたり、生捕りにされたり、射殺されたりする野生のカモシカ達。彼らに一体どんな罪があるというのだろうか。今のような環境を作り出したのは他でもない人間自身なのに。

岳子や木曾生をはじめ、大助、あつ子、和歌子そして罪深い人間の犠牲となったカモシカ達、みんなみんな天国で幸せにと祈らずにはいられない。

友の会の今年度残り事業

- くんせい作り教室 一月二十一日
- 歩くスキーの会 二月十一日予定
- 一入会方法その他お気軽に博物館内
- 友の会事務局へお問い合わせ下さい

山と博物館 第34巻 第12号
 一九八九年十二月二十五日発行
 発行所 長野県大町市 TEL026-2211
 大町山岳博物館
 印刷所 長野県大町市俵町
 大栄タイムス印刷部
 定価 年額 一、三〇〇円(送料共一切手不可)
 郵便振替口座番号(長野四一三三九九三)